

底本：郭店楚墓竹簡 + 馬王堆漢墓帛書

反映：北京大学 西漢竹書 老子

補：韓非子(解老篇) 引用句

決定版

老子新釈

— 老子の本義を究明する —

勝田祐輔 著

一九七三年、前漢時代の墓から絹布に書かれた帛書『老子』が出土、その二十年後に戦国時代の楚の墓から、現存最古の竹簡『老子』三十一章分が出土した。最近、北京大学入手の『西漢竹書 老子』は司馬遷の時代の竹簡であった、今回活かすことができた。紀元後の改変皆無のこれら資料から老子の元々の思いを読み解き、誤りを正すことに努めた。老子は道家の原点、これまでの『老子』を読み、疑問を持った再読者 歓迎。

決定版

老子新釈

— 老子の本義を究明する —

勝田祐輔著

ホシニナル出版

大^{たい}怨^{えん}を和^わするも、必^よず餘^{えん}怨^{えん}有^り。焉^いんぞ以^もて善^{ぜん}と爲^なす可^べけんや。

—— 『老子』第七十九章 帛書 德経の最終章) より

解釈

個人にであれ敵国に対してであれ)与えた深い怨みは、たとえ和解したとしても、必^よず幾^{いく}らかの怨^{えん}み(むこり)が残^{のこ}るもの。そのようなことで、どうして善^{ぜん}であるとする^{こと}ができれば、元々怨^{えん}まれぬように^{こと}だ(。

まえがき

本書は、1993年 古代楚^その墓から出土した二千数百年前 戦国時代書写で最古の『老子』竹簡(楚簡)を底本とし、未出土の章は1973年に前漢の墓から出土した帛書^{はくしょ}(絹布に書かれた本)『老子』から補い、さらに戦国時代末期に成った『韓非子』解老篇の老子引用句を反映させた。これこそが現在到達可能な最古の『老子』テキスト、老子の思想解明に役立つと考えた。

それまでの種々の写本(通行本『老子』)は、いずれも紀元後のものであって帛書との間に多数の改変や書写誤りによる異同があること、さらに通行本間においても種々異同があるとの事情がある。ちなみに帛書『老子』と王弼本とを比較すると、全体5千余字の内約2割の文字に異同があり、さらに帛書と竹簡との間にも数多くの文字に重要な異同(改悪など)がある。「精緻を極めた考証学的手法による推測には限界があり、より古いテキストには遥かに及ばない」とする(文献[23])。既存の『老子』のどの注釈書にも、違和感のある箇所が少なくない。いつか違和感の無い本を実現したいとの思いが強かった中で、中国において馬王堆帛書『老子』校注書、続いて郭店楚簡『老子』校注書が刊行され始めたのであった。

帛書や楚簡の発見により、違和感が解消できた例は多い。第38章(徳経の第1章)、第1章(道経の第1章)等々、どの注釈書にも首を傾げる箇所があり、「これは正しく読み解けてない」と思わせる箇所の解決を図った。

例えば、第38章における「上徳・・」「上仁・・」「上義・・」「上禮・・」各句の「上」が、従来は形容詞とされていたが、今回、筆者は動詞(上ぶ)と解すべきことを論証した。通行本には、「上徳・・」の次に一つだけ「下徳・・」の句、即ち「下徳爲之而有以爲」が存在したが、帛書の甲本・乙本ともにこの句が無く、『韓非子』解老篇にも無いこと、とりわけ「上禮爲之而莫之應也、則攘臂而扔之」の「上禮・・」を「高い禮・・」と解するような解釈には違和感が強かったことから閃いたものである。この種の解読には、少しの違和感も見逃さぬ徹底した論理的思考が重要と考える。さらに第38章に関しては、二千数百年前の『韓非子』以来、今日まで引きずってきた解釈誤りと思しき「前識」の解釈を、今回、厳密に論証して正し得たと考える。「前識」は、「知^ちの働^{はたら}きを指したのもの」とする(諸橋轍次[14])を始め、知る限りでは

どの注釈書も「予見する知」とか、儒家の徳目 仁・義・礼・智の「智」であるとする。本書において、「前識」がそのようなものでは決してないことを、論理的に筋道を立てて明確に示した。これは、二つの論拠に基づく簡潔なものであって、誰もが容易に理解でき納得し得るものであると確信する。

『老子』の紀元前の写本が出土したことが契機となって、老子の元々の思想をよく知りたいとの予てからの思いを具現すべく、菲才浅識を顧みず今日に至るまでこのことに没頭してきた。

以前、推敲中の数章を、東北大学大学院の浅野裕一教授および大阪大学大学院の湯浅邦弘教授にお送りしたことがあった。しばらくして、真に有難いことに浅野先生からは「頂いた注釈には新しい解釈も多く含まれているので、充分に一説として成立し得る、・・・」、そして湯浅先生からも「興味深く拝見しました。是非今後とも考察を継続頂きたいと存じます。・・・」との大変温かいお励ましのお言葉を頂いた。その後、浅野先生から北京大学が入手した「北京大学収蔵珍貴西漢竹書」の情報(2009/11/10 付け『光明日報』の記事)をいち早くコピーしてお送り頂いた。続いて湯浅先生からも同じくその情報をお届け頂いた。これに勇気づけられて、2013年の冬に出版されたばかりのA3版(!)『西漢竹書(貳)』(前漢 武帝期頃の竹簡『老子』-- 略称「漢簡本」)を入手し、活用することができた。両先生に対しまして、ここに心より深く感謝申し上げる次第であります。

一方、郭店楚簡における書写誤り、文字脱落、竹簡欠落による欠字の指摘等々、とりわけ陳錫勇先生の深い洞察による研究(文献[4])に負うところ大であったこと、さらにその後出版された丁四新先生の著書(文献[5])、さらに、彭裕商/吳毅強先生の著書(文献[6])からも有益な示唆を受けることができ、大いに活用することができた。

諸先生方に対しまして、ここに改めて衷心より深い感謝の気持を表明するものであります。

2015年 4月

著者

目次

まえがき	1
参考文献	6
解説	8
凡例	16
道経(上篇)	
1章(帛) 道の道とすべきは、恆(つね)の道に非ざるなり	17
2章(楚) 天下皆 美の美たるを知るや、悪なるのみ	19
3章(帛) 賢をたつとばざれば、民をして争わざらしむ	21
4章(帛) 道はむなしきも、これを用うれば盈たざる有るなり	22
5章(楚) 天地は仁ならず、萬物をもって芻狗と爲す	23
6章(帛) 谷の申びるは死せず、これ玄牝と謂う	24
7章(帛) 天は長く地は久し	25
8章(帛) 上善は水に似たり	26
9章(楚) 持してこれをみたすは、そのやむるにしかず	28
10章(帛) 營魄(えいはく)を載き一を抱き、能く離るること	28
11章(帛) 卅(さんじゅう)の輻は一つの轂(こく)を同じうす	30
12章(帛) 五色は人の目をして盲(めい)しむ	31
13章(楚) 人は寵辱に驚くがごとくし	32
14章(帛) これを視れども見えず、これを名づけて微という	34
15章(楚) 古(いにしえ)の善く士たる者は、必ず微妙にして玄達し	36
16章(楚) 虚を致すこと恆なり	37
17章(楚) 大上は下これ有るを知る	40
18章(楚) 故に大道 廢れて すなわち仁義有り	41
19章(楚) 智を絶ち辨を棄つれば、民の利は百倍す	42
20章(楚) 唯(い)と訶(か)と、相い去ること幾何(いくばく)ぞ	44
21章(帛) 孔なる徳の容は、唯だ道にこれ従う	46
22章(帛) 曲なればすなわち全く	48
23章(帛) 希言なるは自然なり	50
24章(帛) 企(つまだ)つ者は立たず	51

25章(楚)	^{すがた} 状有り混成し、天地に先んじて生ず	52
26章(帛)	重きは軽きの根たり	54
27章(帛)	善く行く者は轍迹(てっせき)無し	55
28章(帛)	其の雄を知り、其の雌を守れば	56
29章(帛)	夫(そ)れ大制は割くこと無し	58
30章(楚)	道をもって人主を佐(たす)くる者は、兵を以て	59
31章(楚)	君子、居ればすなわち左を貴び	61
32章(楚)	道は恆に名無し	63
33章(帛)	人を知る者は智なり	64
34章(帛)	道は泛(はん)として、其れ左右すべきなり	66
35章(楚)	大象を説きて、天下に往く	67
36章(帛)	將(まさ)にこれを翁(しぼ)ませんと欲すれば	69
37章(楚)	道は恆に爲す無きなり	70
徳経(下篇)		
38章(帛)	上徳は徳とせず	72
39章(帛)	昔の一を得たる者	75
40章(楚)	返なる者は道の動なり	77
41章(楚)	上士は道を聞けば	78
42章(帛)	道は一を生じ、一は二を生じ	80
43章(帛)	天下の至柔は、天下の至堅を馳騁する	82
44章(楚)	名と身といずれか親しき	83
45章(楚)	大成は缺くるが若く	84
46章(楚)	天下に道あれば、走馬を却けて	85
47章(帛)	戸を出でずしてもって天下を知り	86
48章(楚)	學を爲す者は日に益し	87
49章(帛)	聖人は恆に心無く 百姓の心を以て心と爲す	89
50章(帛)	生に出でて死に入る	90
51章(帛)	道これを生じて、徳之れを畜い	92
52章(楚)	天地に始め有り、もって天地の母と爲す	93
53章(帛)	我れをして知をかかげ有らしむれば	95
54章(楚)	躁は滄に勝ち、静は熱に勝つ	96

5 5章(楚)	徳を含むことの厚き者は、赤子に比す	97
5 6章(楚)	これを知る者は言せず	99
5 7章(楚)	正をもって邦(くに)を治め	101
5 8章(帛)	その政素素(びんびん)たれば	103
5 9章(楚)	人を治め天につかうるは奮(な)にしくは莫(な)し	105
6 0章(帛)	大邦を治むるは、小鮮を烹(に)るがごとし	107
6 1章(帛)	大邦なる者は下流なり	108
6 2章(帛)	道なる者は萬物の主なり	109
6 3章(楚)	無爲を爲し、無事を事とし	111
6 4章(楚)	其の安きは持し易く	113
6 5章(帛)	道をおさむる者はおもて民を明にするにあらず	116
6 6章(楚)	江海の百谷の王たる所以は	117
6 7章(帛)	天下皆、我れを大なりと謂うも	118
6 8章(帛)	故に善く士たる者は武ならず	120
6 9章(帛)	兵を用いるに言有り	122
7 0章(帛)	吾が言は甚だ知り易く	125
7 1章(帛)	知らざるを知るは、尚(うえ)なり	126
7 2章(帛)	民これ威を畏れざれば	128
7 3章(帛)	敢えてするに勇なる者は	128
7 4章(帛)	もし民 恆にまさに死を畏れざらんとすれば	130
7 5章(帛)	人の飢うるや、其の税を食むことの	131
7 6章(帛)	人の生まるるや柔弱	132
7 7章(帛)	天の道はなお弓を張るがごとき	133
7 8章(帛)	天下に水より柔弱なるはなし	134
7 9章(帛)	大怨を和すれば、必ず餘怨有り	136
8 0章(帛)	小邦寡民	137
8 1章(帛)	信言は美ならず	138
付録 1	郭店楚墓竹簡『老子』の章配列順序	141
付録 2	老子の宇宙生成概念	143
あとがき		144
索引		145

参考文献

以下に、入手可能なものを中心に参考した文献を挙げる。

- [0] 鄒安華編，『楚簡與帛書老子』，民族出版社，2000年
- [1] 彭浩，『郭店楚簡老子校讀』，湖北人民出版社，2001年
- [2] 廖名春，『郭店楚簡老子校釋』，清華大学出版社，2003年
- [3] 聶中慶，『郭店楚簡《老子》研究』，中華書局，2004年
- [4] 陳錫勇，『郭店楚簡老子論証』，里仁書局，2005年
- [5] 丁四新，『郭店楚竹書老子校注』，武漢大学出版社，2010年3月
- [6] 彭裕商／吳毅強，『郭店楚簡老子集釋』，巴蜀書社，2011年11月
- [7] 高明 撰，新編諸子集成『帛書老子校注』，中華書局，1996年
- [8] 徐志鈞，『老子帛書校注』，學林出版社，2002年
- [9] 北京大學出土文獻研究所，『西漢竹書(貳)』，上海古籍出版社，2012年12月
- [10] 蔣錫昌，『老子校詁』，成都古籍書店，1988年(商務印書館，1937年版の影印)
- [11] 年陳永裁／黃炳輝，『老子章句解讀』，上海古籍出版社，2001
- [12] 池田知久，馬王堆出土文獻詁注叢書『老子』，東方書店，2006年
- [13] 小川環樹，世界の名著4『老子』，中央公論社，1968年／文庫版，1973年
- [14] 諸橋轍次，『老子の講義』，大修館書店，1973年
- [15] 福永光司，中国古典選『老子』，朝日新聞社，1978年
- [16] 木村英一／野村茂夫補，『老子』，講談社文庫，1984年
- [17] 金谷 治，『老子 — 無知無欲のすすめ』，講談社學術文庫，1997年
- [18] 楠山春樹，『「老子」を読む』，PHP文庫，2002年
- [19] 蜂屋邦夫，『老子』，岩波文庫，2008年
- [20] 吳九龍 主編，『孫子校釈』，軍事科學出版社，2000年
- [21] 澤田多喜男，帛書老子乙本卷前古佚書『黃帝四經』，知泉書館，2006年
- [22] 竹内照夫 訳注，新釈漢文大系『韓非子』，明治書院，1960年
- [23] 浅野裕一 訳注，『孫子』，講談社學術文庫，1997年
- [24] 村山 孚 訳注，中国の思想10『孫子・呉子』，徳間書店，1965年

- [25] 金谷 治 訳注, 『荀子』, 岩波文庫, 1962 年
- [26] 福永光司 訳注, 中国古典選 12 『莊子』, 朝日新聞社, 1978 年
- [27] 楠山春樹 訳注, 新編漢文選『呂氏春秋』, 明治書院, 1998 年
- [28] 楠山春樹 訳注, 新釈漢文大系 62 『淮南子』, 明治書院, 1988 年
- [29] 金谷 治 訳注, 中国古典選『孟子』, 朝日新聞社, 1978 年
- [30] 司馬遷, 『史記列伝』, 小川環樹、他 訳, 岩波文庫, 1975 年/『史記世家』, 1980 年
- [31] 吉川幸次郎 訳注, 中国古典選 3 『論語』, 朝日新聞社, 1978 年
- [32] 趙雅麗, 『《文子》思想及竹簡《文子》復元研究』, 北京燕山出版社, 2005 年
- [33] 彭裕商, 『文子校注』, 四川出版集團巴蜀書社, 2006 年
- [34] セネカ, 『怒りについて』, 茂手木元蔵訳, 岩波文庫, 1980 年
- [35] マルクス・アウレリウス, 世界の名著 13 『自省録』, 鈴木照雄 訳, 中央公論社, 1968 年
- [36] クセノフォン, 『ソークラテースの思い出』, 佐々木理 訳, 岩波文庫, 1953 年
- [37] エピクテートス, 世界の名著 『要録』, 鹿野治助訳, 中央公論社, 1968 年
- [38] サアディー, 『薔薇園』, 黒柳恒男訳, 大学書林, 1985 年
- [39] プラトン, 『国家』, 藤沢典令夫 訳, 岩波文庫, 1979 年
- [40] 任継愈, 『老子』(The Book of Lao Zi), 外文出版社, 1993 年
- [41] 星川清孝 訳, 新釈漢文大系 34 『楚辞』, 明治書院, 1970 年
- [42] 湯浅邦弘, 『諸子百家』, 中公新書, 2009 年
- [43] 浅野裕一 編, 『竹簡が語る古代中国思想』, 汲古選書, 2005 年
- [44] 武内義雄, 『老子原始』, 弘文堂, 1926 年
- [45] 『舊新約聖書 引照附』, 日本聖書協会, 1972 年
- [46] 鎌田 正, 米山寅太郎, 『漢語林』, 大修館書店, 1994 年
- [47] 勝田祐輔, 『知の価値 — 思索へのトリガー —』, 晃洋書房, 2000 年

解 説

1. 老子について

司馬遷の『史記』[30]によれば、老子(姓は李、名は耳、字は聃)は楚の苦県(今の河南省)の人、古代周王朝の守蔵室の役人(図書館の司書とされる)を務めた隠君子(君子にして隠者)、晩年になって周の国力が衰えたと見て、もはや長く止まるべきでないことを悟り西方に向かった。途中、国境の関所の長官 関令尹(尹喜)の請いにより、上下二篇(『道徳経』)五千余字を書き記した後、いずこへともなく立ち去って、その後のことは誰も知らない。孔子が周の都へ赴き、老子に会って礼を問うたことなども記されているが、これらは史実でない可能性が濃いようである。その背景には、儒家あるいは道家の側にそのような伝説を作り出した動機があったのかも知れない。

孔子の生きた時代は春秋時代である。老子(老聃)は、司馬遷の言う如く春秋時代の人、あるいは戦国時代の人かも知れない。老聃が本当はいつの時代のどういう人であったか、司馬遷が執筆に使った資料がどのようなものであったか、司馬遷の記述がどこまで正確であるかは判らない。老聃その人に関する古いまとまった資料は『史記』しか無く、『老子』という書の中に**固有名詞**がまったく含まれてない。老子と文子の問答で構成されている通行本『文子』は、『淮南子』より後代の書で偽書と考証されている。近年、道家の書『文子』竹簡断片が河北省の漢墓から出土した。『文子』竹簡は、楚の平王と文子との問答で構成され(文子は戦国時代の楚の平王の臣とする考証がある)、先秦思想研究のための貴重な文献として、1995年末に竹簡『文子』釈文が出版され、大部の研究書出版(文献[32], ...)が相次いでいる。竹簡『文子』には、帛書『老子』テキストの解釈を左右するような知見は見当たらない。なお、2009年に、帛書より後の武帝期の『老子』を含む西漢竹書(漢簡本)が出現し、本書はこれを活用することができた!

2. 時代背景

『老子』に関連する人物の時代を以下に簡潔に示す(湯浅邦弘[42]ほかを参考)。年代には、異説や生没年の不明なものもある。竹簡『老子』(楚簡)が出土した郭店1号楚墓の下葬年代は、紀元前三百年前後と考えられてき

た。その後、『史記』(白起王翦列伝)における記述を踏まえた考証から、「郭店 1号楚墓の造営時期の下限は前 278 年であり、下葬時期をそれ以降に引き下げることは、物理的に全く不可能となる」との見解が示されている(浅野裕一[43])。馬王堆帛書『老子』については、漢の高祖、恵帝、文帝らの諱字を避けているか否かの考察によって、甲本・乙本それぞれの書写年代が推定されている。近年のこのような考察を参考に、関連する略年表を以下に整理して示す。テキスト書写のおおよその年代は、「◆」を付して示す。

2. 1 略年表

春秋時代(前 770--404)

老子(李聃?)(?--前?) 司馬遷の記述の如く孔子より前の人であるかは不詳。

孔子や墨子よりも後の人とする説もある(武内義雄[44])

孔子(孔丘)(551--前 479) 『論語』は孔子らの言行が整理されたもの。

孫子(孫武)(?--前?) 兵家 呉王闔廬(?--前 496)に仕える。『孫子』は武経七書中最高とされ、「兵」に関し不戦の思想で『老子』との共通点を思わせる。

墨子(墨翟)(480?—前 390?) 墨家 前 444 楚の宋国攻撃を止める。儒家の仁が愛に差別を設けることに反対し、差別なく愛する兼愛や「尚賢」(賢を貴ぶ)を唱え、非戦論を強調した。

戦国時代(前 403--221)

呉子(呉起)(440?—前 381?) 兵家 楚の宰相(法家の先駆をなす思想)。魏や楚に仕えて武功があった。『呉子』は、武経七書の主要な一つ。

商鞅(?--前 338?) 法家 前 361 秦に入り後に宰相となる。法家の学を学び秦の孝公に仕え、富国強兵を目指して大改革を断行、秦の天下統一の基礎を作る。

楊朱(?--前?) 貴己(個人主義)を説く。老子の説を継承したとも言われる。無為の立場で人を害せぬことに努め、「貴己」(己を貴ぶ)を唱える。

孟子(孟軻)(370?--前 289?) 儒家 前 320 梁の恵王に王道政治を説く。孔子の教えの後継者を自負し(仁義を重視)、諸国を巡り王道政治を説く。性善説を主張する。『孟子』には、『老子』からの影響は見受けられない。

恵施(370?--前 310) 名家。概念規定の限界性や判断の相対性を論じ、不安定な人間の知識から超越、概念を分析し名称と実体との一致を求める立場。

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。